

小学生の日本酒検定

先日、「日本酒サービス研究会・酒匠研究会連合会」（略称SS1）が2010年から実施している日本酒検定で、初めて小学生の女の子（新倉茜音さん）が合格したとの報道がありました。

今回日本酒検定に合格した新倉さんは、3歳から包丁を握り、テレビ番組の小学生料理王選手権では優勝する程の腕前で、「子ども天才料理人」といわれているそうです。酒の肴のレシピ本など、親子で既に3冊も出版しており、将来は母親と立ち飲み屋を経営したいという夢を持っているそうです。

料理にはお酒を使う場面が沢山出てきますから、料理を通じて日本酒に対する知識を身に付けたものと思われそうですが、彼女は、料理の腕だけでなく考え方もしっかりしていて驚くばかりです。

ただ、小学生に日本酒検定の受験資格を与えていることに違和感を感じたのは私ばかりではなかったようで、SS1に対して「未成年者に飲酒を誘発する」などと批判の声が上がったのは当然のことです。

SS1側は当初、「消費の低迷が続く業界立て直しのために、若年層へ訴求力ある対策は不可欠。早くから酒の魅力を知ってもらい、未来のファンを育てたい。」と述べていました。

確かに、日本酒業界を巡る環境は大変厳しく、蔵元も減少の一途を辿っており、危機感があることは理解できますが、子どもを利用することに大人のエゴを感じるのは、私だけではないでしょう。

未成年者に対して酒を誘発しかねない、という懸念は決して杞憂ではありませんし、何より、業界の立て直しのために子どもを巻き込んではいけません。

SS1では、様々な批判の中、結局、今後は「日本酒検定の受験資格に年齢制限を設けないことが、未成年者の飲酒を誘発することにつながる可能性を否定できないことを理由に、本検定の未成年者の受験受付を停止することにしました」としていますので、世間を騒がせたこの問題は一応決着することになりました。

日本酒造組合中央会では、酒の広告宣伝に厳しい自主基準を設けており「C

Mなどのモデルには子どもを絶対使わず、子どもが興味をひきそうなキャラクターやタレントの起用さえ固く禁じている」としてはいますが、当然のこととはいえ、一つの見識です。一方、SSIの側に、そうした業界の考え方に対する配慮が欠けていたことは遺憾だと思います。

今後も、子どもを巻き込んだ問題が生じないとは限りませんが、私たち大人が常に考えていかなければならないことは、如何なる場合でも、子ども達への影響ということです。

「この程度は良いだろう」という「この程度のハードル」を大人の都合で低くしてはいけません。常に、「子ども達は成長過程にある」ということへの十分な認識と配慮が不可欠です。(塾頭 吉田 洋一)